

特別活動及び総合的な学習の時間の、大学授業に おける「近況報告」は、良好な人間関係を醸成する

“Recent Report” in university class will make good relationships of
“Special Activities and Integrated Studies”.

小池 幸
MIYUKI KOIKE

はじめに

大学生は人間関係を欲しているのか？と問われれば、いささか心許ないが「YES」の返答となる。いささかと表現したのは、学生の、ささやかな願いと消極的な諦めの狭間の中において、葛藤の連続ととらえるからである。

周知の通り、新型コロナウイルスの影響やインターネットの普及により、本来、人と人の直接的なコミュニケーションが必須であった日々の生活が激変し、特に、大学生においては、大海原に一人だけ放り出された心境になるのもこれまた然りである。人間関係の停滞、あるいは衰退の現状と言っても過言ではなからう。

しかしながら、求められる教育の方向性は「生きる力」の育成であり、キーワードとして「アクティブラーニング」が声高に叫ばれている。そして、その土台となるものが良好な人間関係・コミュニケーションに求められることは直視しなければならない現実がある。

1. 研究の方向性

1.1 テーマ設定の理由

「アクティブラーニング」は校種を越えた全ての小・中・高等学校及び大学等に求められており、特に、授業の工夫・改善・充実が図られなければならない。「アクティブラーニング」は、「どのように学ぶか」ということの総括的な指摘であり、さらに、3つの学びである、「主体的な学び・対話的な学び・深い学び」がその達成に向けた重要な柱となる。

この達成に向け、個人と集団の結びつき、いわゆる良好な人間関係は不可欠であり、その醸成において何らかのアクションが示されなければなら

ない。本実践では、具体的方策として、授業時間における「近況報告」を通すことにより、人間関係及びコミュニケーションの改善と充実を図っていく。

1.2 テーマ解決への具体的手立て

担当している授業科目は、教員免許取得のための必修である「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」である。該当クラスは1年28名男女混合後期14コマである。

この14コマ毎回の授業開始時に、学生全員が「近況報告」を行い、コミュニケーションを活発にし、良好な人間関係を醸成していくものである。

1.3 本実践に関わる学生の状況

28名中、女子学生は2名であり、男子学生がほとんどを占める。出身地は埼玉県を初めとする他都県に渡っているが、自宅通学者は多い。部活動やサークル活動に参加している割合は少ない。

今年度の1年生は、高校1年生の終盤から卒業まで、生活の全てをコロナ禍の中で送っており、多感な高校時代を閉塞感と制約に縛られた時間の刻みへと変化させられてしまった被害者でもある。言うまでもなく、人間関係やコミュニケーションの深化の進展具合は良好と呼ぶには悲観的である。

今年度、令和4年（2022年）9月より後期の授業が開始されたが、当然と言うべきか、高校時代からの知り合いが同席する状況は皆無である。いわゆる独りぼっちの状況と呼ぶことができる。

年度の前半、すなわち大学入学当初から全面的に対面授業になったとはいえ、高校時代には当たり前のように行われてきた級友とのコミュニケーションは、半年経った今もその進展は極めて遅速であった。

学生に、高等学校と相違することを問うと、「自分の教室がない」「自分の机や椅子がない」「ホームルームの友達がいらない」など、一言でまとめれば、「居場所がない」という思いが大勢を占めた。また、本クラスの人間関係を望ましいものへと発展させる期待を問うと、「あまり期待していない」「無理なのでは」「必要性が感じられない」などの意見が目立った。無気力、無感動といった類の状況ではなく、「諦め」「弱気」といった類の状況が顕著であり、「関わり」というアクションから無意識のうち逃避している状況も見受けられたが、同時に、言葉とは裏腹に「もし可能ならば

多くの人とコミュニケーションが取れたらいいな」というささやかな願いも感じ取ることができた。

1.4 テーマと大学生活との関連

大学イコール「モラトリアム」(猶予期間)という言葉が世に出て久しい。どちらかと言えば、プラス面で使用されるというより苦言や揶揄の場面で登場が多い。社会人前の、大学における学生の不安定さや自由の謳歌を風刺しているともとらえられる。

当然のことながら、ほとんどの場合、教員になるための前段階が大学であり、そのための基礎基本が教職課程である。すなわち、高等学校までの生徒としての自分から、大学の教職課程における教員としての自分の自覚と実践が問われることになる。言い換えれば、大学時代こそ教員としての資質・能力等を育む最適な期間としてとらえなければならない。

しかし、現実には、自分と教員をオーバーラップできず、教員に求められる資質・能力の中で、人間関係構築の重要性をつかめないうまま教員免許取得に至るケースが多いことも事実である。

一般的に学校現場の教員は、教諭として学級を担任することから始まる。当然のことながら、学級経営の中に占める生徒の人間関係の醸成やコミュニケーションの活発化は担任に求められる重要な内容である。むしろ中心的内容と押さえた方がしっかりといく。

すなわち、大学時代に日本全国から集まった学生集団の中で、一人一人がコミュニケーションを活発化し人間関係を醸成していくという重要且つ必要なアクションを起こせる素地を作ることが、教員としての重要な資質・能力の獲得につながる事となる。この具現化を、授業という場面を通して教授側からの取組が次項へとつながる。

1.5 テーマと特別活動・総合的な学習の時間との関連

学習指導要領における特別活動・総合的な学習の時間の目標は次の通りである。なお、両科目の目標は小学校・中学校とも同一である。また、求める資質・能力は割愛している。

【特別活動の目標】

「集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動

に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することを通して、次のとおり資質・能力を育成することを目指す。」

【総合的な学習の時間の目標】

「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。」

両科目に共通する重要な着目点は、共に「自己を高める」ことと「他者と協働でして学ぶ」ということに集約できる。すなわち、そのための大前提が、望ましく良好な人間関係構築の歩みにあるということに置き換えることができる。

周知の通り、学校は一人一人が個人として尊重され、その個人が活かされる集団活動が求められる。両科目ともいわゆる教室の椅子と机、あるいは教室の中だけで目標が達成できるのではなく、広く空間を選び、また、学年学級を超えた人的交流と協力の中で目標達成に迫る活動を展開する。

逆説的になるが、望ましく良好な人間関係の構築が担保されない限り、両科目の目標達成はおぼつかないということとなる。もちろん、最初からオールOKな集団はほぼ存在しない。人間関係の構築と活動の展開を同時にすすめることとなり、いわゆる双方の往還的關係としてとらえておくことが重要となる。

本授業「特別活動及び総合的な学習の時間の指導法」では、示すとおり、特別活動と総合的な学習の時間を授業回ごとに展開する。双方の授業内容は相違しても、人間関係構築という点においては授業を貫く一貫した人間関係の構築が可能となり、次項に続く「近況報告」の取組に人間関係の構築に向けた一方策として説明する。

2. 「近況報告」について

2.1 「近況報告」の概要

毎回の授業開始から約20分間の中で、全員の学生それぞれが日々体験したこと、考えていること、取り組んでいること等を題材にして全員の前で発表し、発表後、一人一人が教室内を自由に移動し、さらに不特定多数の

学生とスピーチ題材に基づいたコミュニケーションを行い、人間関係を深めて行く取組である。

2.2 「近況報告」の実際

座席配置は私が第1回授業時に示し、最終回まで指定席として継続する。授業は1コマ100分に設定されており、5限は16時50分に開始し、以下①～⑥で進行する。

なお、全体の座席配置図（名前入り）を事前に配布し、また、折りたたみのネームカード（3角柱3面に名前記入）を事前に作成しておく。第1回目の授業のみ、「近況報告」のねらいを周知し、ネームカードを作成後スピーチに移行する。

- ①座席配置はいわゆるスクール形式で、教員と学生が対面する。
- ②発表者の学生は、自席から黒板前にネームカードを持参の上移動し、全学生の全面に立ちスピーチを行う。なお、スピーチ開始時に、「○○です」とネームカードを大きく示し、顔と名前を聞き手にアピールすることを毎回励行する。
- ③スピーチの時間は一人約30秒である。
- ④スピーチの順番は座席配置図に示したある通りとする。（学籍番号順）
- ④スピーチの最中、聞き手の学生は座席配置図に示されている発表者の欄に、要点を極めて簡単なキーワードとしてメモする。
- ⑤教員はスピーチ内容へのコメントは一切加えず、発表者の呼名のみとする。
- ⑥全員のスピーチが終了後、各自座席を立ち、スピーチ内容についてさらに聞いてみたい学生のところに移動しコミュニケーションを深める。

2.3 「近況報告」の題材について

第1回の実践開始前に、スピーチの題材例（視点）について以下に示した。あくまでも例であり、強制するものではない。どのように取り上げるかは学生に一任している。

- ①旅行やイベントなど出かけたこと（場所、思い出、感動など）
- ②自分の趣味
- ③最近購入したもの
- ④現在取り組んでいること（アルバイト含む）

- ⑤最近のニュースで感じたこと
- ⑥自己主張（意見発表）
- ⑦聞き手への質問
- ⑧その他

2.4 取組を通じた変容

実施後の学生の自己評価は巻末に記載する（抜粋）

（1）個人の変容

学生一人一人については巻末に別掲となるが、総じて、

- ①他者への関心が低かったが、多くの人の生き様を知ることができ、人間関係の重要性やありがたさを実感できるようになっている。
- ②人前でのスピーチは苦手であったが、みんなが自分の内容や自分に興味・関心を示し、具体的にコミュニケーションが取れてきたことに喜びを感じる。

- ③本授業内容である、「特別活動」と「総合的な学習の時間」において、学ぶこと活動することの楽しさや充実感を肌でつかんでいる。など
「近況報告」がスタートした最初の頃は、スピーチ内容の肉付けが乏しく、10秒程度で切り上げることが多く見られたが、回が進むにつれて、準備に余念がなく、スピーチ内容に合わせた資料（パソコン画像、具体物など）を積極的に用意し、30秒をより充実した時間へと転換させてきた。

また、「隣は何をする人？」のとらえであったが、回を重ねる毎に、他者一人一人に対しての興味・関心が膨らみ、特に、スピーチ後のフリートーキングの時間数分間において、積極的なコミュニケーションが全員から見られた。

さらに、各自がスピーチする内容について集中して聞き取り、他者一人一人の個性の尊重や存在の素晴らしさ等を刻んできた。教室という無機質な空間の中にあっても、「友」「仲間」という連帯意識が生まれてきたことも特質できる。

（2）クラス集団の変容

総じて、

- ①凝集性（まとまり）の視点から、グループワークや全体ディスカッションの場において、自然発生的にリーダーが選出され、活動に移行できて

いる。

- ②モラル（道徳性・規範意識）の視点から、個々の意見や行動に対し、尊重と親和的な人間関係が醸成されてきており、自由闊達な意見表明や意見交換が可能となってきた。
- ③モラル（やる気）の視点から、私からの指示待ちではなく、資料配付や後片付け、グループワーク移行時の迅速性などが確立されてきている。当初は、授業開始時刻に集合していたが、回を重ねる毎に、時間前に多くの学生が集まり、教室のあちこちで小グループができ、それぞれにコミュニケーションを取る場面が確実に増えていった。耳を澄ませば、「近況報告」の時にキャッチした情報について様々なコメントが飛び交っており、インフォーマルな時間の共有が仲間意識を育み、人間関係の深化をとらえることができた。

特に、授業内容では、グループ活動が多いことが特性でもあり、論題について各グループのメンバー全員がフランクに意見交換できたことは、本授業の学習効果をより深めるための有益なこととして特質できる。

また、授業が終了した後も教室に残り、構築した人間関係で会話する姿がしばしば見られ、人間関係構築を渴望する真の願いが引き出されてきたことも同様である。

学生一人一人が、次回の授業を待ちわびる思いが、友との出会いとオーバーラップし、人間関係構築という控えめな願いが、誰にとっても堂々と主張できるものへ現実化した。

2.5 「近況報告」における留意事項

人間関係構築の手段としての「近況報告」を、ただ単に実施したということに終始することなく、この「近況報告」をきっかけに、フォーマルにもインフォーマルにも人間関係が広がりさらに深まることを目的としていることから、学生各自が、思いを込めたスピーチがももとなることの重要性を継続的に説いていく必要がある。特に、スピーチ原稿は、その日に短時間で考えるのではなく、課題の一つとしての扱いで充実を図っていった。

また、学生同士のフリートーキング時間の終了後、私が、一人一人のスピーチに対する一言コメントを全体の前で行い、内容の確認や賞賛を短時間に行うことで、各自のスピーチに対する評価として対応した。

さらに、座席配置図にメモした内容は、全員のスピーチがどのようなも

のであったかのポートフォリオともなり、取組の成果としての具体物となり、一人一人の成就感や満足感につながるよう進めた。

3. 成果と課題

3.1 成果

総論でまとめれば、良好な人間関係を育てることなく、「アクティブラーニング」に代表される他者との協働活動の取組は、表面的になされている割合が多分に含まれており、この杞憂を覆す「近況報告」の実践は対応如何によっては、満足のいく学習効果を下支えする価値ある取組ととらえられる。

また、そのための「近況報告」は、学生個々の、心の内側に入り込み、掛け値なくコミュニケーションに結びつけることを通して、相互が胸襟を開き、互いを受け入れる態勢を整えることにより、良好な人間関係を構築し、ひいては生活意欲は勿論のこと、学習効果への波及が確実になされることもつかむことができた。

これらのことから、大学における人間関係の構築は必要不可欠という確信を得た。

3.2 課題

本取組は、授業の効果や効率を上げる授業改善及び学生一人一人の生活意欲向上のための一方策として位置付き、人間関係深化やコミュニケーション能力向上は、様々な場面で様々に行われる。統一的なプログラム設定は難しさが伴うが、他の科目においても、特性を損なうことなく、人間関係醸成、コミュニケーション能力向上の取組を取り入れていくことが、充実した授業、充実した大学生生活に必須ととらえる。

終わりに

コロナ禍の中で生じた人間関係の停滞や後退は、ささやかな取組でも、大きな成果を上げることが明らかになったことは、指導するわれわれ教員側への大きな警鐘と共に大切な教訓としてフィードバックされる。特に教育現場を担う大学生だからこそ、人間関係構築を厭わず、積極的に人間関係を欲する積極的なアクションに期待したい。

参考文献

小学校学習指導要領(平成29年告示)・中学校学習指導要領(平成29年告示)・
高等学校学習指導要領(平成30年告示) 以上文部科学省

資料【取組における学生の自己評価】(抜粋)

1 「近況報告」と自分の成長

- 自分の思っていること、相手に伝えたいことを上手く言語化できるようになった。
- 一人一人の思いを知ることができた。その後のフリートークで交友関係を築けた。
- 誰にでも伝わる表現について気を配れるようになった。
- 聞き手が少しでも喜んだり興味・関心を示してくれたりしそうな話題探しに真剣に取り組むようになった。
- 他の人の話題や考えに触れることは新鮮で、自分の考えの幅を広げることに繋がった。
- 自分が教師になった状況を想定できるようになった。
- 自分の今までの取組を振り返ることができ、自身の再発見につながった。
- 自分の話が伝わるようにするため、文の構成を考えた。
- みんなの前で話すことに自信が持てるようになり、恥ずかしさが消えた。
- 聞き手の目を見ながら話せるようになった。
- 友達とのコミュニケーションが、特別活動や総合的な学習の時間に必要なことが分かってきた。

2 クラス全体の変容

- 「近況報告」後、挨拶や質問などが交わされる温かいクラスになった。
- 他者との心理的距離が縮まり、最初よりコミュニケーションがかなり増えた。
- 最初の頃は名前も知らなかったが、名前を覚えることによりクラスが明るくなった。
- 一人一人の思いや考えが出しやすいクラスになった。
- コミュニケーションが活発になり、笑顔が増え、仲がよくなった。
- 全員とコミュニケーションが取れるようになった。
- みんながこの授業に積極的に参加するようになり、ワンチームのクラス

と感じた。

- 人の「近況報告」に対して悪意のない笑い声が増えた。何を言っても大丈夫というクラスになった。
- 最初の頃と比べて、誰かと誰かが話している場面が普段の生活に広がり、校内で会った人との会話場面が格段に多く見られるようになった。
- 個人が埋没しないクラスになったと思います。
- 先生が大学で今までに見てきたどのクラスよりも仲がよくまとまったクラスと誇れます。

3 後輩へのメッセージ

- この「近況報告」をたかがと思うかしっかりと取り組むかでこの授業の充実感、成長度、達成感が変わります。
- 大学の授業で、友達ができる唯一の授業です。大切にしてください。
- 自分が今何をしているのかを考えられるよい機会となる「近況報告」です。
- みんなの前で緊張しますが、話題を共有できることは楽しいですよ。
- 人前で話すことはすぐにはできないので、今から伝える力を養ってほしい。
- 最初は面倒くさいと感じたが、回数を重ねる毎にトーク力が身に付いてきました。
- 話したことがない人とコミュニケーションを取ることで考え方の多様性を知ることができる「近況報告」です。
- 最初は緊張すると思いますが、慣れてくると楽しくなります。そして、スピーチの自信につながりますよ。
- 最初は「だるい」や「恥ずかしい」などの感情があると思いますが、徐々に抵抗がなくなり、みんなの反応を見るのが楽しくなりますね。
- 生徒の前に立ち堂々と話さなければならない教師という職業に就くだけでなく、様々な場面で力になることを学びます。
- 「コミュニケーション」という言葉の意味が「近況報告」の活動でよく分かりますよ。